

## 総社市一丁圪38号墳の発掘調査

渡邊恵里子・四田 寛人・柴田 英樹

### 1 遺跡の位置と環境

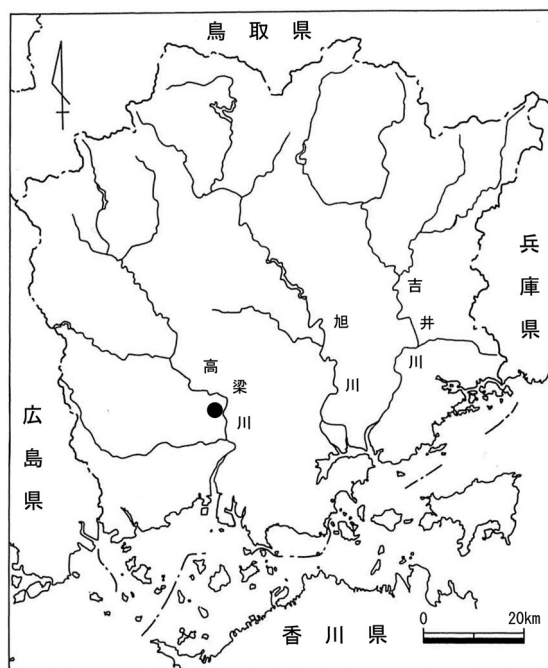
一丁圪38号墳は高梁川右岸の秦地区に所在する（第2図）。標高381mの正木山から東南に延びる尾根上に立地し、眼下には高梁川とその支流が形成した平野を見下ろす。高梁川は県西部を南北に貫流する一級河川で、県南部と県北部を結ぶ、重要な内陸水路である。古代以前には本墳の対岸に当たる湛井あたりで東に分かれ、足守川を経て瀬戸内海へ注いでいた。一方、西へは新本川が分かれ、高梁川との合流点となるこの平野部が水上交通の結節点となっていたことは想像に難くない。この平野部を取り巻く山塊上には弥生時代の首長墓に比定される伊与部山墳丘墓や宮山墳丘墓、三角縁神獣鏡が出土した秦上沼古墳（墳形不明）、3世紀後葉の茶臼嶽古墳（前方後方墳、全長55.4m）、4世紀初頭の一丁圪1号墳（前方後方墳、全長約70m）、4世紀後半の秦大圪古墳（前方後円墳、全長約56m）、三笠山古墳（前方後円墳、全長約70m）、5世紀末～6世紀初頭の秦茶臼山古墳（前方後円墳、全長約38m）などの大型首長墳が造営されており、この地の重要性を物語っている。時代が降っては井山城、荒平山城、囊越城、夕部山城などの山城が築かれており、軍事的な要所とも言える。

新本川下流域では6世紀後半の金子石塔塚古墳には貝殻石灰岩製（浪形石）の石棺が納められ、歩揺の可能性のある金銅製の亀甲文板片が出土した。また、終末期の長砂2号墳の横口式石槨も特筆される。両岸山裾には板井砂奥製鉄遺跡や黒谷製鉄遺跡など製鉄遺跡が多く営まれており、渡来系技術の積極的な受容が、秦の地の勢力を支えていたと考えられる。秦の地は『和名抄』でいうところの下道郡秦原郷に当たり、渡来系一族秦氏の居住地という説も有り、飛鳥時代創建とされる秦原廃寺は秦氏の氏寺と伝えられている。

さて、一丁圪古墳群は、標高190m近い尾根最高所に築かれた1号墳を盟主墳とし、30基以上の小墳で構成される古墳群である（第3図）。1号墳から北に続く尾根上の2～33号墳、東の12～17号墳、南の6～11号墳の大

きく3方に分かれ、11号墳から南東に延びる尾根上に34～38号墳がある。現状では本墳が群中最も南に位置する。さらに本墳下方には金子古墳群が続き、その先端丘陵頂部には秦大圪古墳、秦上沼古墳が築かれている。

一丁圪古墳群では平成22年度以降数次にわたって測量調査や確認調査が実施されており、その内容が報告されている<sup>(1)</sup>。特に1号墳は県南最大規模となる全長約70mの前方後方墳で、特殊器台形埴輪の出土から築造が4世紀前半に遡ることが確認され、その重要性から平成28年に県指定史跡となった（指定名称は一丁圪古墳）。また、4号墳は一辺14～15mの方墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬形埴輪・人物形埴輪・須恵器が出土し、5世紀後半の築造とされている。7号墳では埴輪片、11号墳では須恵器片が採集され、7～11号墳については5世紀代の築造と推定されている。また、15号墳は、石室の構造や出土玉類の特徴から、5世紀代の築造で、渡来系要素を備えていることが明らかとなっている。一方、多くの古墳は未調査で、墳丘規模や時期など不明な点も多い。（渡邊）



第1図 遺跡位置図（1/1,500,000）





- 1 一丁坑38号墳 2 一丁坑古墳群 3 金子古墳群 4 秦大坑古墳 5 秦上沼古墳 6 茶臼嶽古墳 7 荒平山城跡 8 秦廃寺瓦窯跡 9 秦原廃寺 10 風水古墳 11 惣堂遺跡 12 奥場古墳群 13 秦茶臼山古墳 14 南山遺跡 15 目田古墳群 16 難波古墳群 17 舟山古墳群 18 難波遺跡 19 長砂古墳群 20 浦越古墳群 21 山口古墳群・ハザ古墳群 22 板井砂奥製鉄遺跡・板井砂奥古墳群 23 板井砂遺跡 24 黒谷遺跡・黒谷製鉄遺跡 25 黒谷古墳群 26 押木田古墳群 27 牛塚古墳群・牛塚西古墳 28 市後遺跡・市後製鉄遺跡 29 古母池古墳群 30 九代大塚 31 囊越城跡 32 砂場遺跡 33 木村山城跡 34 馬入道山城跡 35 神古墳群 36 八代古墳群 37 仙人塚古墳 38 砂古古墳群・砂古22号墳 39 牛飼山古墳群・牛飼山遺跡 40 夕部山城跡 41 伊与部山弥生墳丘墓 42 伊与部山古墳群 43 磨崖仏 44 井山城跡 45 佐野山古墳 46 井尻野古墳群 47 井尻野遺跡 48 井尻野西川遺跡

※網掛けは散布地範囲を示す

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/30,000)



## 2 調査の経緯と経過

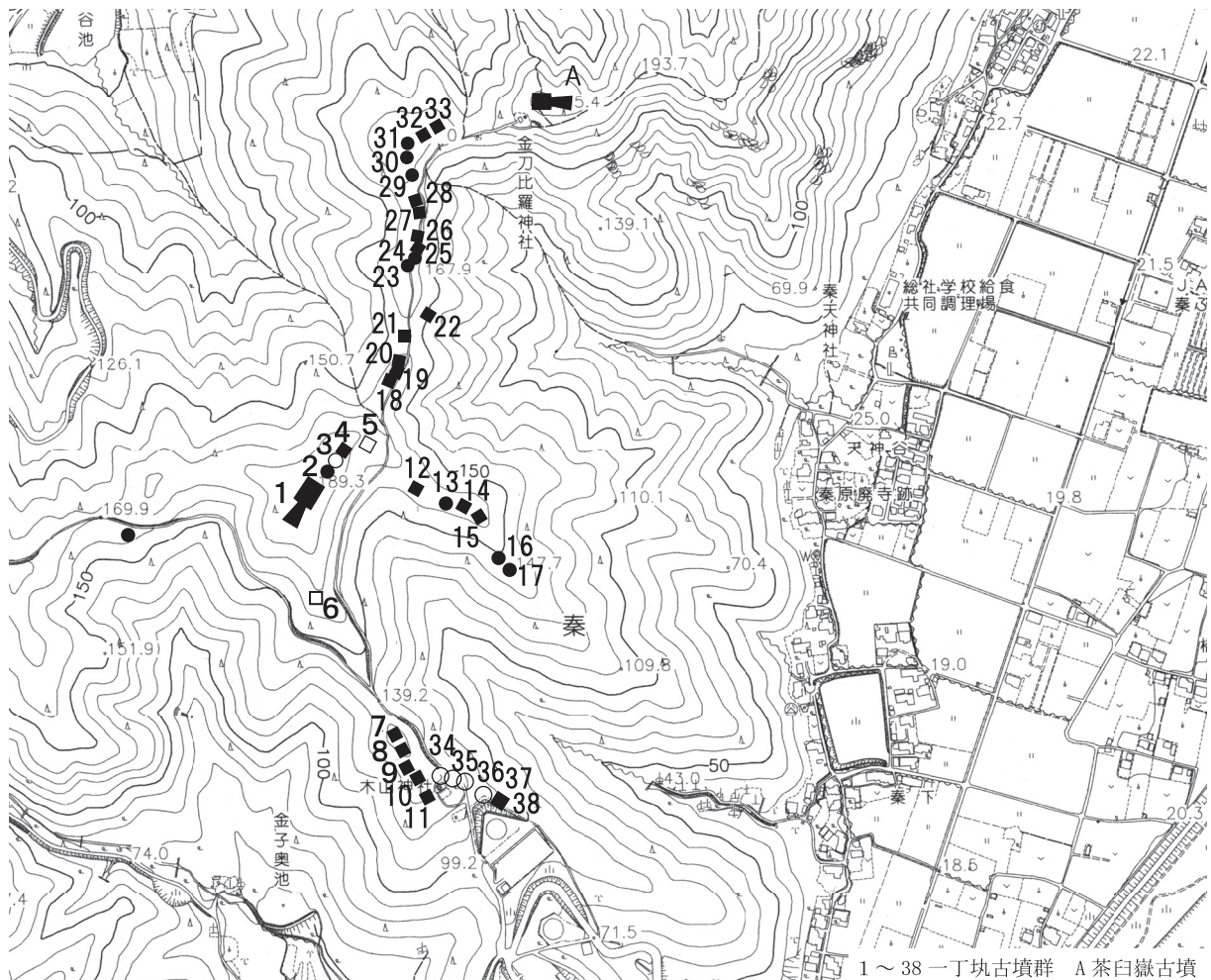
### (1) 調査の経緯と経過

岡山県総社市秦地内の丘陵上には、岡山県広域水道企業団（以下、企業団）が設置した総社第2調整池があり、総社市西部や倉敷市真備町を中心とした地域への給水を行っていた。しかし、そうした地域の人口増加によって今後成羽や美星への給水が不安定になることが想定されるとともに、現調整池の点検や改修を考えると増設が必要と判断するに至り、企業団では総社第2調整池増設を計画していた。ちなみに企業団は水道用水を構成団体（県と10市7町）に供給する、地方自治法で定められた一部事務組合（特別地方公共団体）である。

平成29年8月に当該事業計画について企業団から文化財課に対して連絡があり、9月に協議を行った。その内容は、現第2調整池の北東隣接地を候補地として用地

買収を行い、保安林解除が順調に完了すると仮定して、平成30年秋の着工を目指して準備を行っていたところ、県の遺跡地図で事業地が埋蔵文化財包蔵地にかかっていることが判明したのでどのように対応したらよいということであった。それに対して文化財課は、遺跡地図では古墳群の範囲を表示しているだけなのでその地点の状況は分からないことと、当該丘陵地には多くの古墳が存在することから未発見の古墳があるかもしれないので現地確認を希望する旨を伝えた。併せて、場合によっては事前の発掘調査が必要になる可能性もあることから、用地選定も含めた事業計画の見直しも視野に入れておくよう求めた。

立ち入りが可能になった平成30年4月に文化財課と企業団で現地を踏査したところ、候補地内にはすでに南西の半分が削平された古墳とみられる地形の高まりを確認できた。なお、その後文化財課と総社市教育委員会の



第3図 一丁坑古墳群分布図 (1/10,000)

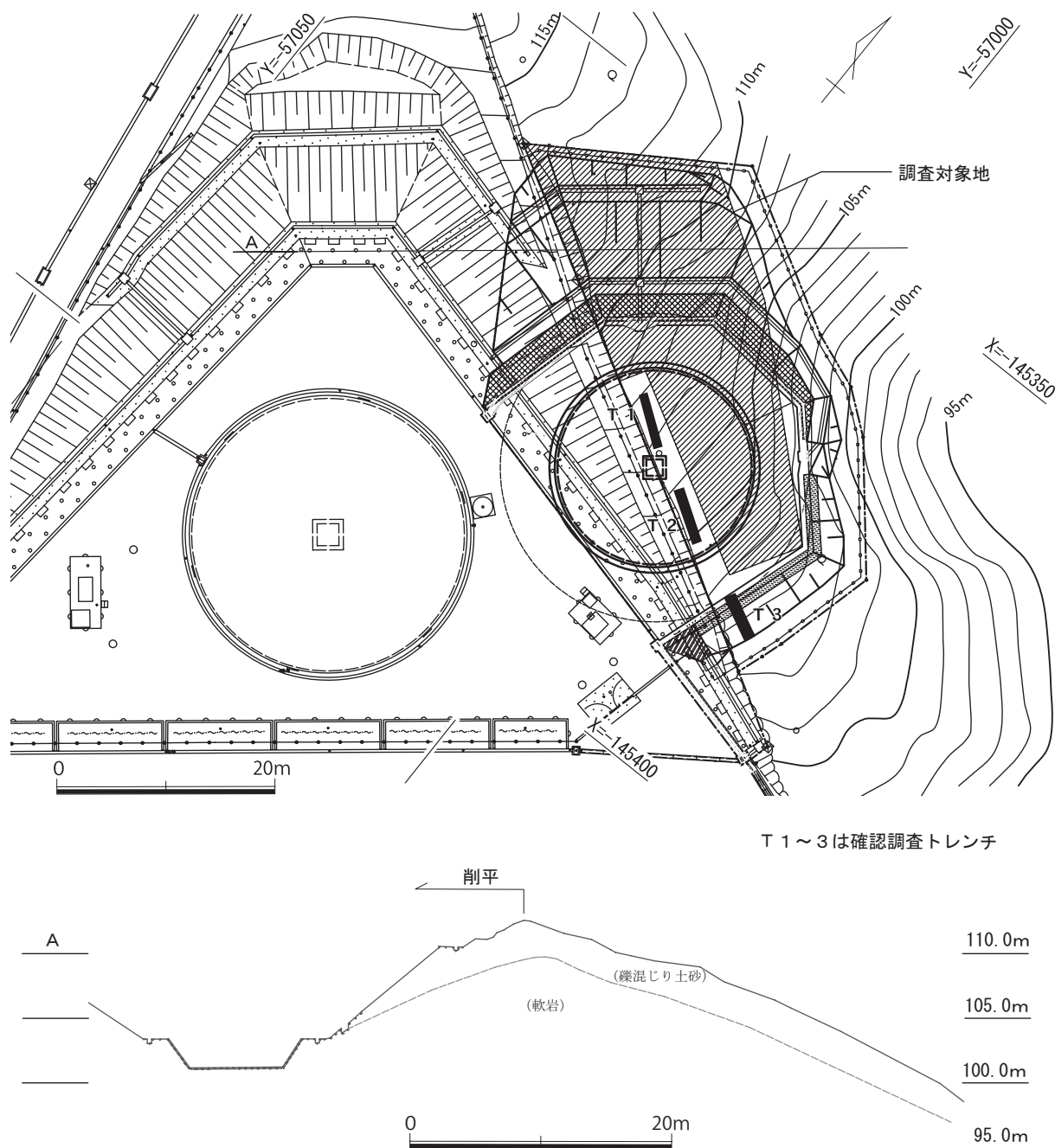
担当者で再度踏査し、候補地西の山側にも5か所の高まり等が確認できたため、西から順に周知の古墳番号に続けて番号を付し、当該古墳を一丁坑38号墳とした。

文化財課は、この時点であらためて企業団に事業計画や設計の見直しを求めたが、同年5月に企業団としては候補地の変更等は困難であるとの結論に至った。これにより事業対象地内の埋蔵文化財包蔵地については、やむを得ず事前の発掘調査が必要になった。ただ、38号墳以外の遺構等が所在する可能性も否定できないことから、

確認調査の必要があることを説明して了承を得た。

平成30年10月には企業団による用地買収は終わったが、確認調査に当たっては保安林内作業許可を受ける必要があり、その手続きについて企業団の協力を得た。許可後の11月26日～28日に県古代吉備文化財センターは、3本のトレンチを設定して確認調査を実施したところ、38号墳以外の遺構等は認められなかった。

この結果をもとに文化財課は、企業団と調査時期や期間、範囲に関する協議を進めるとともに、調査経費につ



第4図 造成計画平面図 (1/600) ・断面図 (1/500)



いては積算を示し、その負担について企業団に協力を求め了承を得た。また、発掘調査までに保安林に関わる許可を受けて対象地の樹木伐採を完了させること及び掘削の作業許可を得ておくよう企業団に依頼し、同年3月末までにいずれも完了した。なお、企業団から平成31年3月に文化財保護法第94条に基づく発掘の通知が提出され、同月で県教育委員会は、発掘調査の実施と調査の結果で重要な遺構等が発見された場合は別途協議するよう文書で勧告した。

発掘調査は、県古代吉備文化財センターが調査員2名を配置し、平成31年4月から6月にかけて実施した。その後の報告書作成については、協議段階において通常の報告書の体裁をとることが困難と判断したため、本書で調査成果を報告し公開することになった。なお、確認調査・発掘調査の実施に当たっては、駐車場等に関して隣接する民間保養施設の協力を得た。（柴田）

#### （2）調査の体制

##### 岡山県教育委員会

教 育 長 鍵本 芳明

##### 岡山県教育庁

教 育 次 長 高見 英樹

##### 文化財課

課 長 大西 治郎

参事（文化財保存・活用担当）横山 定

総括副参事（埋蔵文化財班長）柴田 英樹

主 幹 河合 忍

主 任 原 珠見

##### 古代吉備文化財センター

所 長 向井 重明

次長（総務課長事務取扱）佐々木雅之

参事（文化財保護担当）大橋 雅也

##### 〈総 務 課〉

総括主幹（総務班長）甲元 秀和

主 任 東 恵子

主 任 多賀 克人

##### 〈調査第三課〉

課 長 弘田 和司

総括副参事 渡邊恵里子

（調査・整理担当）

主 事 四田 寛人（調査担当）

### 3 調査の概要

#### （1）概要

38号墳は、既存の総社第2調整池によって既に大半が削平されており、用地内南西角の半円形の高まりがその残丘と想定されていた。地形は、東に尾根筋が延び、若干の緩斜地もあったが、北へ急激に下がり、調査対象地の北半は崖状となっていた。今回の調査対象地は保安林内であったため非常に制約が大きく、一度に作業可能な範囲も限られていたので、作業スペース及び排土場所の確保をするため、まずは墳丘規模の把握と古墳以外の遺構の有無の確認を目的としてトレンチ（T1～3）での調査を行った。その結果、38号墳が想定以上に大きな方墳の可能性があること、T2より東には遺構が無いことが判明し、T2より西側の調査に注力することとした。

T1・2では摩滅した埴輪片や須恵器細片が数点出土したが、古墳から流出してきたと思われる、この2本のトレンチをもってT2以東の調査は終了し、北側急斜面地を排土置き場として利用しながらT2以西の調査を進めた。

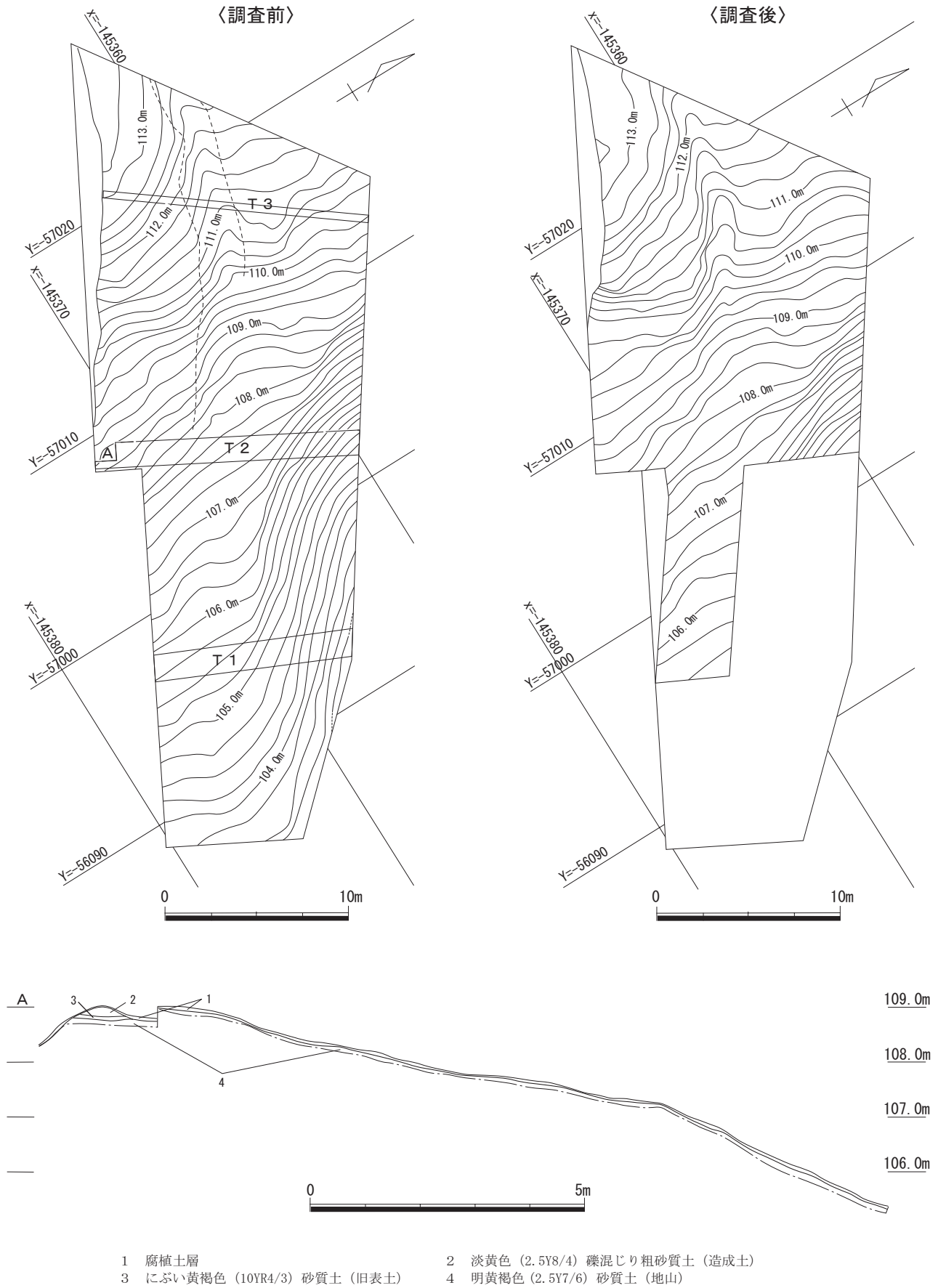
表土を除去すると、道として利用していた部分が北周溝となり、墳丘の北東コーナーも明らかとなった。残存部から一辺約15mの方墳で、墳丘の約6割が削平されていたと推定される。主体部は削平されていた南側法面の観察でも痕跡は確認できず、消滅していたと考えられる。

周溝内からは比較的多くの埴輪や須恵器が出土し、墳丘上では円筒埴輪が2基見つかった。東周溝中央部では、炭を伴う浅い土坑状のくぼみを検出した。北側周溝では集石があり、鉄製品が出土した。

#### （2）墳丘と周溝

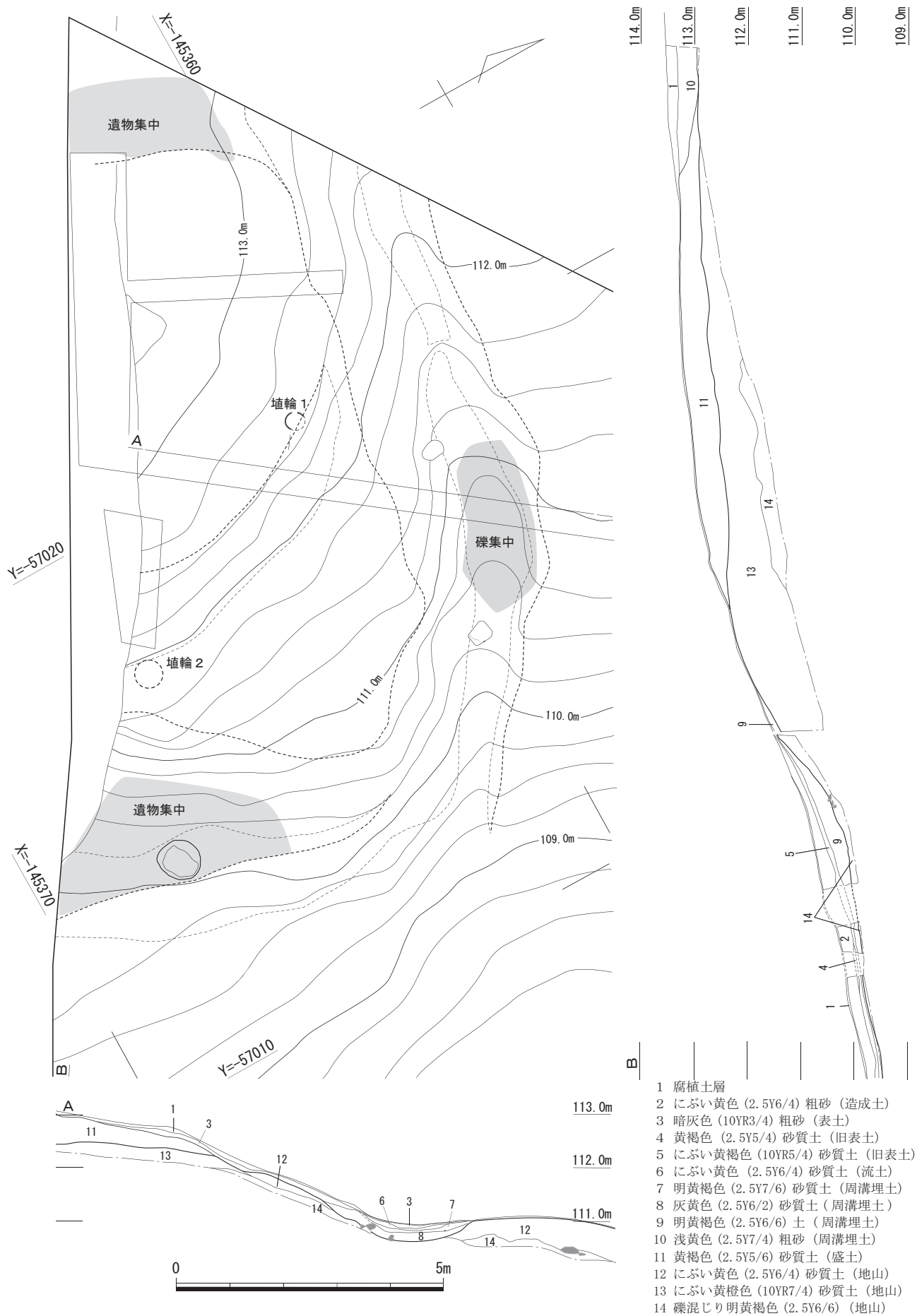
墳丘（第5・6図） 墳丘は既に南半の多くを削平され、西も調査区外となるため全容は不明である。調査前の地表観察では標高112.5mあたりから上方が丸く盛り上がって見えたため径7～8mの円墳と予想していたが、この盛り上がりは概ね盛土範囲と対応しており、盛土と地山の境の不自然な傾斜変換点として認識していたものであった。表土を除去後には周溝が明瞭に検出され、想定以上に大きな方墳であることが明らかとなった。

墳丘東端は、およそ標高110.0mの等高線が南に矩形に曲がり、南北方向に直線的に延びる部分に相当する。



第5図 地形測量図 (1/300)・丘陵断面図 (1/100)





墳丘東側は丘陵先端をカットして造作されており、溝状ではなく、テラス状を呈していた。テラス面の標高は110m前後で、東からの見かけ上の高さは3m以上あり、実在以上の高さを感じさせている。東斜面からテラス上面には20～30cmの流土が堆積し、比較的多くの埴輪片が出土した。なお東墳端からT2まで南フェンス沿いに土塁状の高まりがあったが、フェンス設置時の残土であった（第5図A断面第2層・第6図第2層）。

一方、北周溝西端は調査区外に延びていくが、西周溝東肩口が僅かに検出できた。検出状況から、一辺約15mの方墳と推定したが、東周溝を東辺として想定される方形ラインよりも北西角が内（南）側に入り込んでおり、15号墳のように、古墳の正面となる尾根下方（東）から見た場合により大きく見せる視覚効果を狙って、手前（東）が大きく奥（西）が小さい台形に成形した可能性もある。

墳丘上部も削平を受けてほぼ平坦であるが、最も高い部分でおよそ標高113.5mを測る。表土層はほとんど認められず、腐植土層（第6図第3層）を除去すると、直ぐに盛土（第6図第11層）あるいは地山（第6図第12～14層）に達する。第14層には拳大～人頭大の円礫を比較的多く包含していた。盛土は厚さ40～50cmを測る。盛土と地山の間に旧表土はなく、両者の区別は難しかった。岡山大学特命教授鈴木茂之氏からは、地山は山砂利層が長い年月の間に風化・粘土化した「くさり礫層」と呼ばれるもので、風化し残った円礫以外粘土化して均一に締まっているが、盛土はしまりが弱く、地山内の円礫だったものが壊れて角礫状になり、不均質であるとの教示をいただいている。

周溝（第6・7図） 周溝は墳丘を取り囲むように巡ら

されているが、先述したように、東側はテラス状を呈していた。第6図第9層が東周溝の埋土に当たる。第9層には埴輪を多く包含していた。墳丘東肩口は、かなり上方から掘削しており、急峻である。そのためもあり、北東コーナーはやや鋭角で、突出したような形状となっている。テラス面は東西幅約1mあり、墳丘斜面を含めた南北4.5m、東西1.5mの範囲で破片の状態となった埴輪が多く出土した。やや上方の斜面に貼り付くように出土したものも有り、墳丘上から転落してきた埴輪も含まれる。テラス部中央には径80cm程度の不整円形の浅いくぼみがあり、周辺に炭が多く見られたが、被熱痕跡は無く、性格は不明である。凹み埋土下面からも埴輪片が出土しているおり、周溝に伴う蓋然性は高い。

西周溝は、その東肩口しか検出できていないが、幅2.3m以上、深さ20cmを測る。調査区外地表観察では西肩口の痕跡は見出せなかった。埋土は第6図第10層に対応する。周溝からは大量の埴輪片や須恵器片が、底面に貼り付くような状態で出土した。範囲は南北2.5m、東西1.5mあるが、さらに調査区外の西側へ広がっている。

北周溝は比較的明瞭で、およそ幅2.5m、深さ40cmを測る。埋土は第6図第7・8層が対応している。最終的には墳丘上から流れ込んだ土砂（第6図第6層）で埋没していた。北周溝内には遺物がほとんどみられなかったが、埴輪数片が出土した。細片で摩滅が著しく、上方から転落してきたと考えられる。また、トレンチ近く部分の周溝埋土下層から、鉄器が1点出土している。

第6図のトーンで示した範囲は集石で、第7図に検出状況を示している。集石のうち、南半は上下二面あった。上面の範囲は東西1.4m、南北0.5mで、小さく割れた礫



写真1 墳丘東側堆積状況（北東から）



写真2 西周溝遺物出土状況（西から）



が主体となっている。この礫群を除去したところ、周溝底面にも礫が散乱していた。範囲は東西2.1m、南北0.7mである。大きく、壊れていない円礫が主体であり、上部礫群とは様相が違う。周溝底面の傾斜は、西端と東端との比高差が20cm程度と緩く、北辺の礫が直線上に並ぶ状況から、下部に何らかの施設があることを想定したが、何も無かった。墳丘側に40～50cm大の2石があるが、集石との関連は不明である。地山の山砂利層から表出した可能性もある。  
(渡邊)



写真3 北周溝集石検出状況（東から）



第7図 北周溝内集石 (1/30)

## (3) 外表施設

墳丘上で原位置を保つと思われる円筒埴輪が2基出土した。北を埴輪1、東を埴輪2として記述を進める。

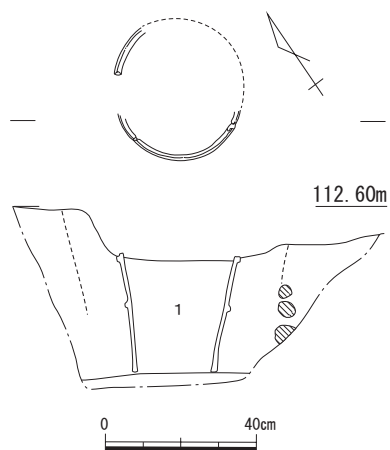
**埴輪1 (第8図)** 墳頂平坦面北縁中央で検出した。樹根による攪乱により埴輪を樹立する掘り方の平面形は明らかではないが、上面径60cm以上、底面径約40cm、検出面から底面までの深さ47cmの規模を有する。掘り方のほぼ中央に円筒埴輪11が置かれており、埴輪の内外は同一のにぶい黄褐色砂質土によって埋められていた。円筒埴輪11は復元の結果3条4段以上の構成と考えられるが、掘り方の深さから考えると少なくとも3段目までは地中に埋設されていたものと考えられる。

**埴輪2 (第9図)** 墳頂平坦面東縁で検出した。埴輪を樹立する掘り方の平面形は円形であり、上面径約40cm、底面径28cm、検出面から底面までの深さ約40cmを測る。埴輪は原形を留めず、埴輪基底部から3段目までの各部位が混在した状態で検出され、断面では破片が摺鉢状に堆積している状況が観察された。また、礫も含まれていた。出土した破片はほぼ接合し12となったが、別固体である円筒埴輪26の筒部片も混入していた。埴輪片の部位と出土位置の関係をみると、基底部に近い破片の方が上方から出土し、中位部分は掘り方壁面に沿って円弧状に出土していた。また、表土除去時に出土した基底部とも接合している。

これらの状況からは、破碎された埴輪片を小穴内に埋置するという行為がなされた可能性がある。廃棄のための施設であるとも考えられるが、掘り方の底径と埴輪の底部径がほぼ一致することから首肯しがたい。一方、後内池古墳に基底部を打ち欠いた後に据え置かれた例があり<sup>(2)</sup>、本例も同様に基底部を打ち欠いて樹立し、後に円筒内にその破片を投棄した可能性が考えられる。(四田)

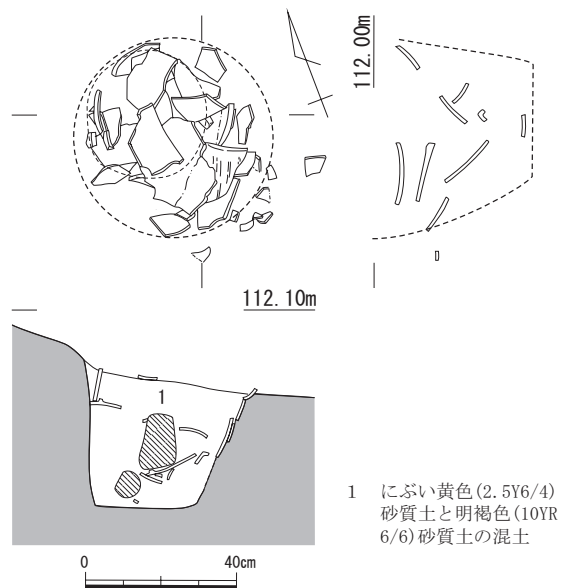
## (4) 出土遺物

遺物は、専用のコンテナにして、12箱出土した。墳丘上の2基の円筒埴輪を除くと6箱程度で、その大部分は東周溝及び西周溝から出土した円筒埴輪片である。摩滅した破片が多い。細片ではあるが形象埴輪も出土しており、特筆される。西周溝では破碎された状態で須恵器も出土した。墳丘外のトレンチや斜面地でも、墳丘から転落してきたとみられる埴輪片や須恵器片を採集している。北周溝からは鉄器が1点出土した。(渡邊)



1 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土

第8図 埴輪1 (1/20)



1 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土と明褐色(10YR 6/6)砂質土の混土

第9図 埴輪2 (1/20)



写真4 埴輪2検出状況(北から)

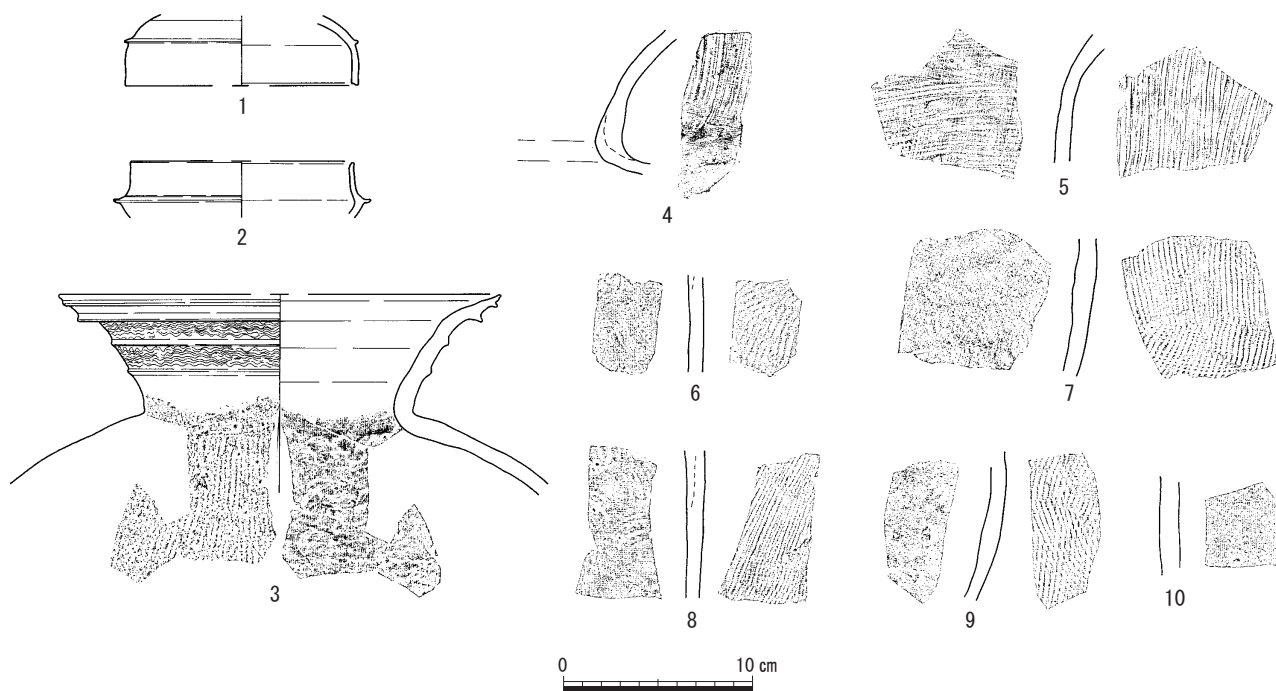


須恵器（第10図） 蓋杯は図示した2点のみである。杯蓋1はフェンス設置時の残土から出土した。天井部はドーム状に丸味を帯び、稜は鋭く、口縁端部の段も明瞭である。幅3cm足らずの細片で不確実であるが、復元口径12.2cmを測る。杯身2は西周溝から出土。全体の1/10程度の細片で、復元口径は径11.6cm。口縁端部は明瞭な段を有する。受け部は屈曲して水平方向へ張り出し、杯部はやや浅い。1・2共に断面色調が、内外器表面近くは灰色だが、中心部は暗紫灰色を呈する。壺3は西周溝から出土。細片の状態で埴輪片に混じって散乱しており、別地点で破碎された後に投棄されたような状態で出土した。口径23.3cm、器高10.6cmに復元される。口縁端部は薄く鋭く延びる。口縁直下と頸部には突帯が廻り、頸部突帯間に櫛描波状文を施す。外面に平行タタキを施す。内面には無文当具痕が残っている。4は東周溝から出土。壺か甕の頸部と思われる。傾きも不詳。外面には粗い柁目による沈線文が縦方向に施され、内面には指頭痕が明瞭に残る。外面は黒色で艶があり、断面は赤紫色。胎土は緻密で砂粒が少ない。5は墳丘外北東側の緩斜地で出土。4と同じ沈線文を有し、胎土・色調も同じことから、同一個体片と考えられる。内面には横方向の擦痕がある。6～10は体部片。6・7は東周溝から出土。外面は平行タタキ、内面は無文。6は内面をナデ消している。8は

北周溝の東半の集石から出土。6・7と同じく外面平行タタキ、内面無文当具痕があり、タタキ原体の類似から、同一個体である可能性が高い。9も外面平行タタキだが、内面には同心円文が観察できる。外面色調は4と似た艶のある黒色。6～8のタタキ目の間隔が3本/cm、9が5本/cmで、別個体と考えられる。10は東周溝から出土。内外とも丁寧にナデ消し、無文。

いずれも細片で型式の特定は困難であるが、形態や全体的にシャープな造りはいわゆる初期須恵器の範疇で捉えられる。また、壺は口縁端部の特徴や突帯の高さからTK73以前とされる菅生小学校裏山遺跡とON46～TK208に比定される法蓮22号墳の間に位置付けられよう。ただし、混入や西周溝が未確認の古墳と共有している可能性も否定しきれず、埋葬時期の比定にはさらに検証が必要であらう。（渡邊）

埴輪（第11～14図） 第11図11・12は墳丘上に原位置を留めて出土した円筒埴輪を図示した。11は埴輪1として示したものであるが、墳丘東側斜面から出土した破片が接合した。基底部径は28.6cm、残存高は43.2cmである。黒斑を有するが、焼成は堅致で赤褐色を呈する。3条の突帯が残存しており、断面はM字形を呈する。3段目に透かし孔が開けられ、3条4段以上の構成をもつものと思われる。突帯間隔は最下段（底部から1段目突帯下部）

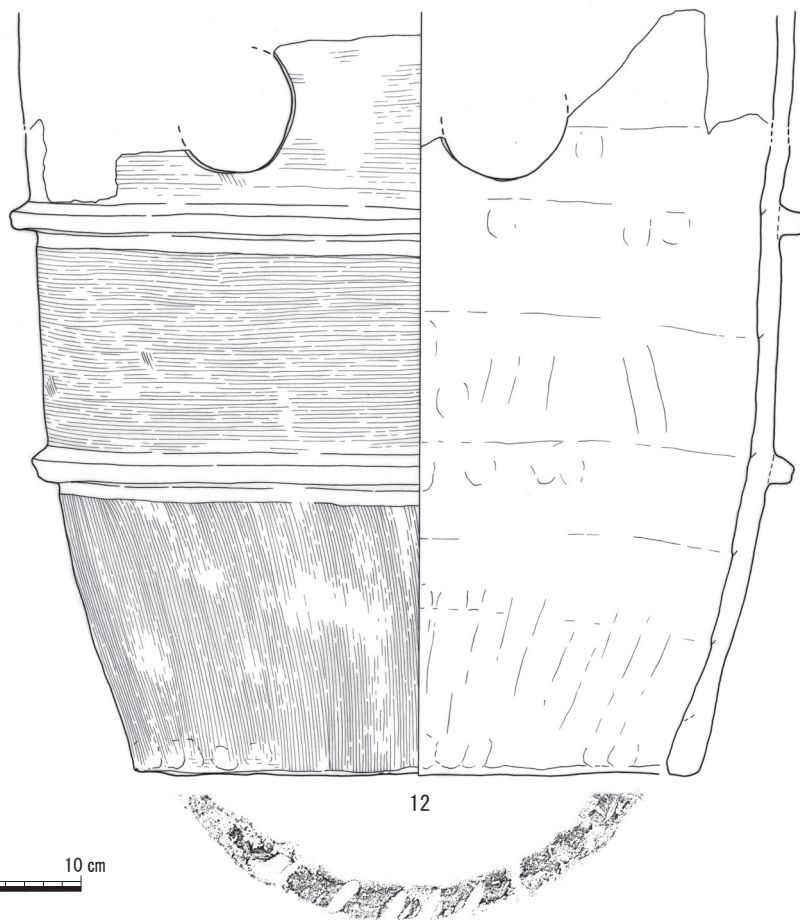
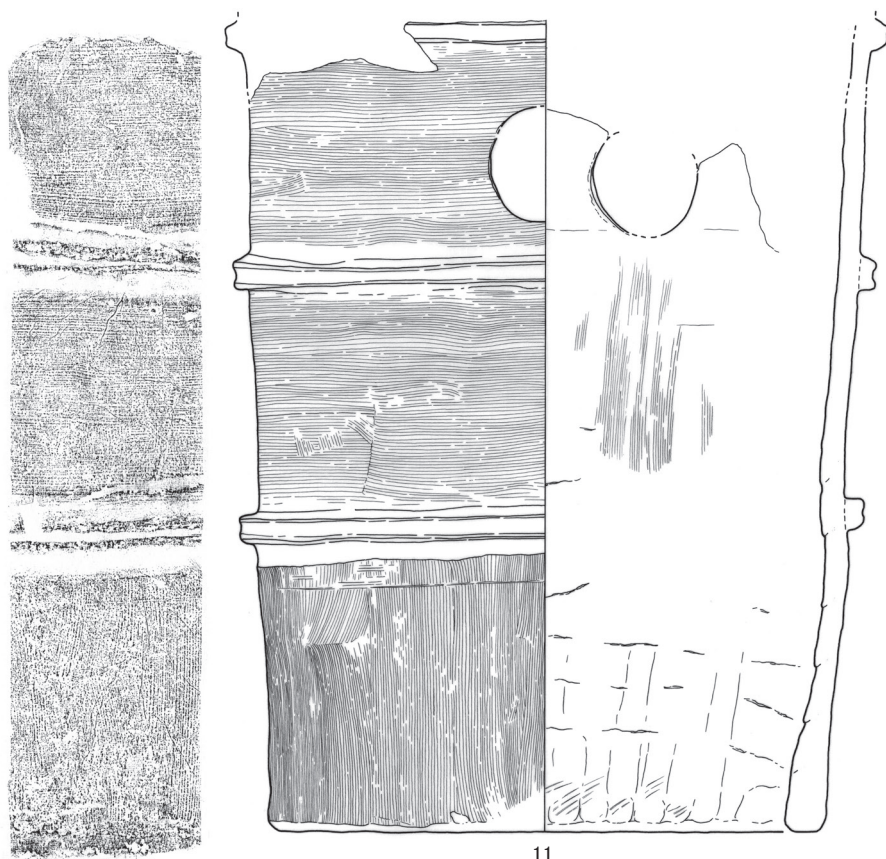


第10図 須恵器（1/4）

で15.7cm、2段目以上（突帯上部から上段突帯下部）では10.6～11.6cmを測る。外面調整は最下段にタテハケ、2～3段目は静止痕の不明瞭なヨコハケが施される。このヨコハケは突帯間を2周以上する。内面は最下段をユビオサエと縦方向のナデで成形し、2段目以上はナデや部分的にハケを用いる。

12は埴輪2として示したもののほか、埴丘東側表土から出土した破片と接合した。底部径は29.9cm、残存高は40.6cmで、黒斑を有する。11と比較してやや軟質でにぶい黄橙色。3段目の筒部までが残存しており、11同様に3段目に透かし孔を有する。筒部径が40cm近い大型で、本来は5条6段以上の構成をもつ可能性がある<sup>(3)</sup>。突帯は頂部を強くなでること

で整形しており、断面はM字形を呈する。突帯間隔は最下段で15.6cm、2段目では11.2～11.6cmを測る。外面調整は最下段がタテハケ、2段目以上は11同様のヨコハケを施すが、原体ハケメ間隔は11より粗い。内面は底部をユビオサエと縦方向のナデで成形し、2段目以上はナデで調整する。また内面と突帯部分にはユビオサエ



第11図 埴輪① (1/4)



が観察される。11・12共に底面には粗朶の痕跡が認められる。11・12は焼成や色調、筒部径は異なるが、その他の規格や調整は非常によく似ている。

第12図には口縁部片を図示している。口縁端部を玉縁状に成形する13～17、やや外反し、口縁端部を丸くおさめる18～20、直立し口縁端部が面をなす21～23の三つに分けることが可能である。13・15・19・20が東周溝、18・22が西周溝、16・17・21が北周溝周辺、23が墳丘の南東部から出土している。14・19には黒斑が認められる。口縁端部を玉縁状に成形するもののうち、13はヨコハケ、14には一次調整タテハケが施されている。口縁端部を丸くおさめるものは、19にヨコハケ、20は内外面にナナメハケが用いられる。口縁端部が面をなすものでは、21にナナメハケが施される。21は先述した埴輪1の上で表土除去時に採集した破片と接合しており、11と同一個体の可能性がある。

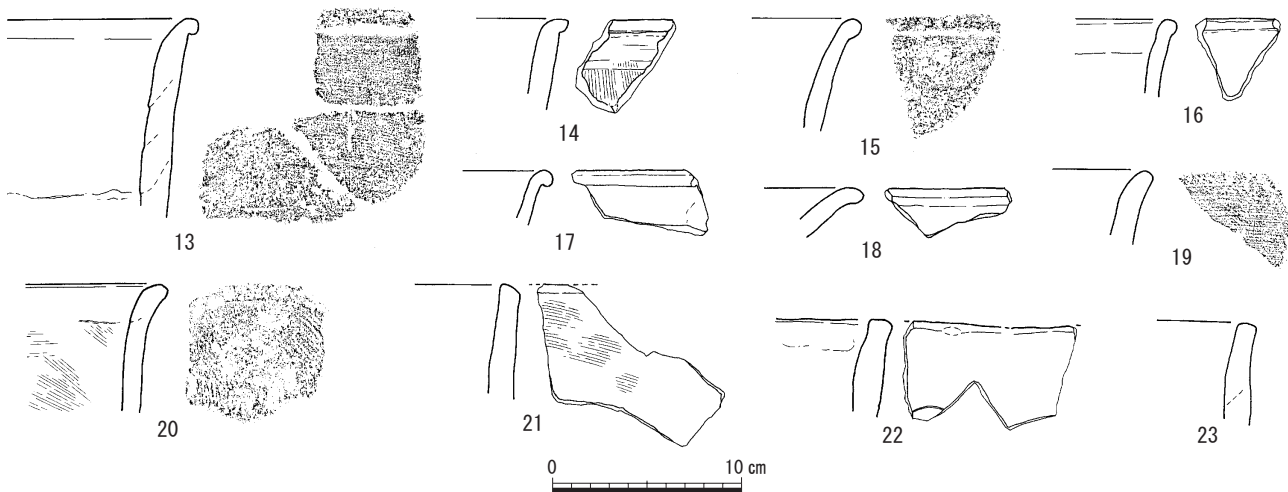
第13図には円筒埴輪の筒部片を示した。出土位置は24～26・29～31・34・41が東周溝、28・32・35・37・39・40・42が西周溝、33は墳丘西側斜面、36・40は北側周溝内、38は墳丘北側斜面より出土した。33は11と、38は12と同一個体の可能性がある。27は12の破片と共に出土している。筒部径を復元しうる24～30をみると、いずれも30～40cmの間に収まる。突帯の断面形状は、突帯頂部を強くんでつけ断面がM字状を呈する24～26・29～32・34～36・38とナデが弱くゆるい台形を呈する28・33・39・40が認められる。外面調整をみると、24・26～29・31～34で二次調整ヨコハケが認められ、これ



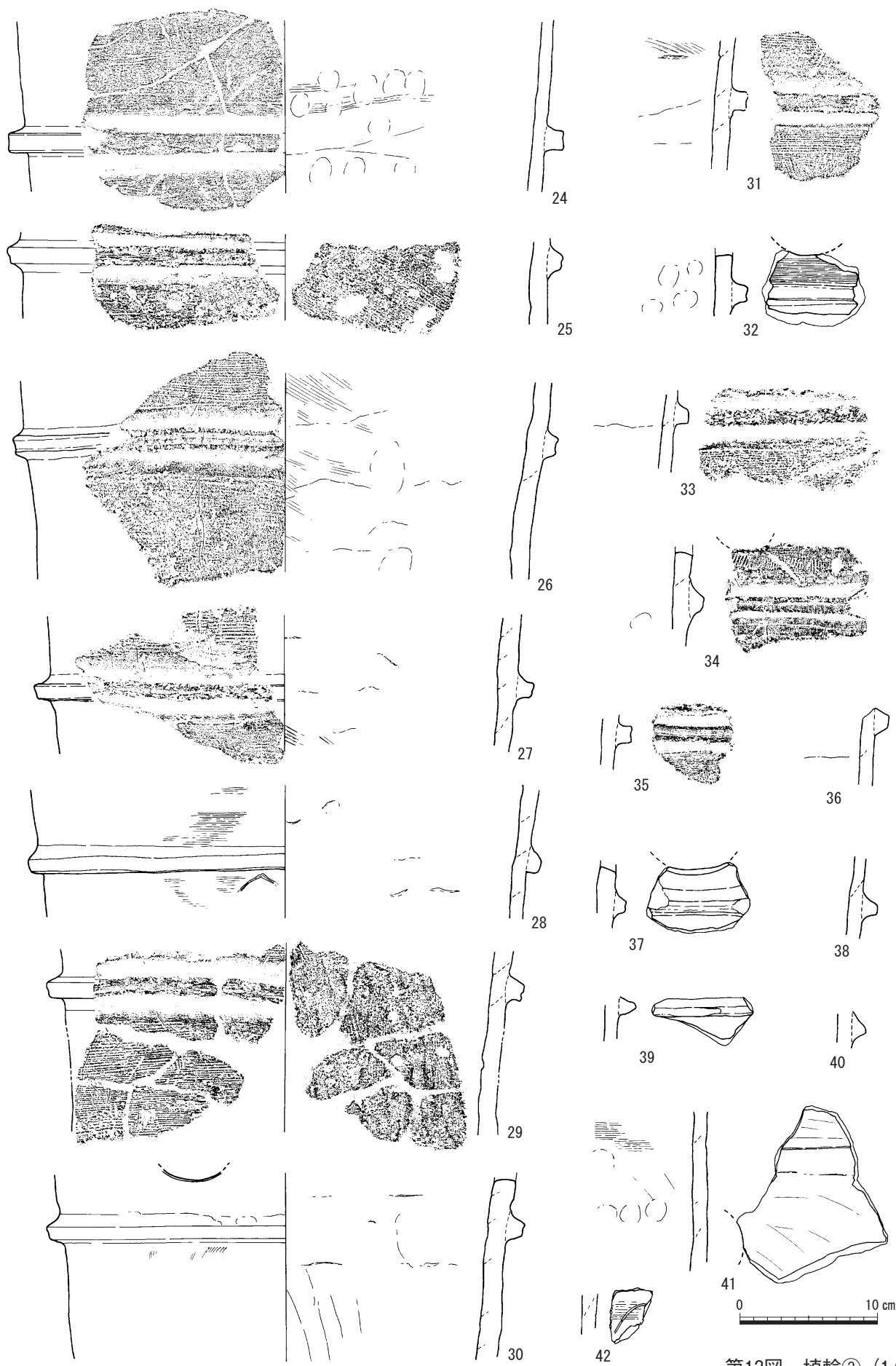
写真5 埴輪1 (11) 外面調整

らには全て明瞭な静止痕は認められない。なお、34では一次調整タテハケの後に二次調整ヨコハケが行われた様子が観察できる。28・42には線刻が施されているほか、30・42には赤色顔料が付着している。また、24・26・29・34・39・40で黒斑が認められた。

第14図は形象埴輪と基底部で、43～46は蓋形埴輪の破片を図示している。43は軸受部から笠部、44は笠部から台部で、笠下半部には線刻等は認められない。45は笠部周縁で、全体の1/16程の小片だが、径約45cmに復元できる。端部に平行して1条沈線を巡らし、さらに沈線を2本垂下させる。46は笠部中央突帯あるいは軸受部下部突帯の破片とみられる。44の笠部中央突帯が台部との接点に近い位置にあることや45の特徴から、松木武彦のいう津堂城山古墳新相タイプからはさみ山タイプの段階に位置づけることができる<sup>(4)</sup>。47は朝顔形埴輪の肩部片である。突帯頂部は強くんでられており、断面形状

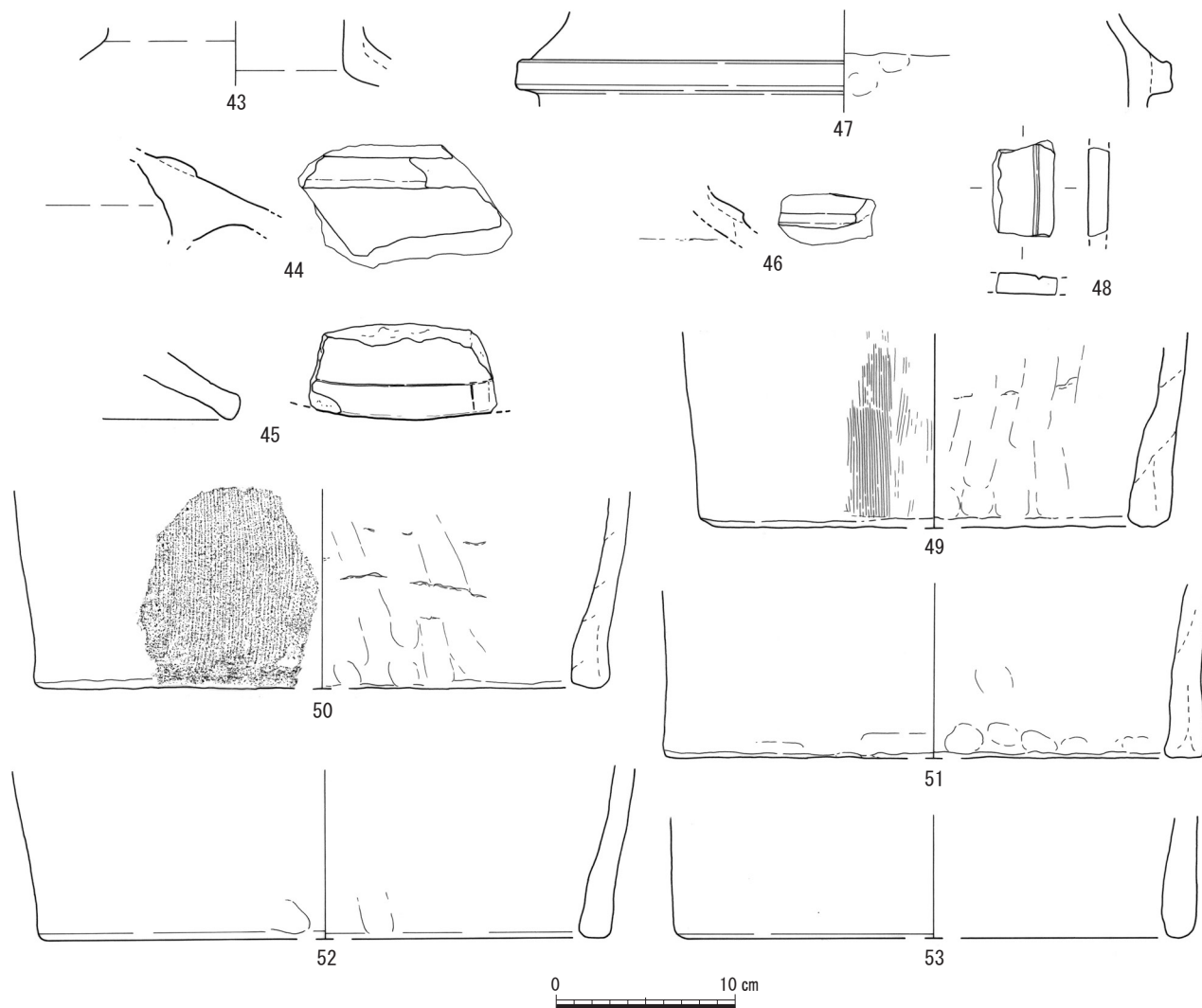


第12図 埴輪② (1/4)



第13図 埴輪③ (1/4)



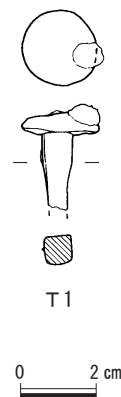


第14図 埴輪④ (1/4)

はM字形を呈する。肩部の外面調整はヨコナデ、筒部は突帯下にヨコナデを施している。48は家形埴輪の一部と思われる。長辺約5.8cm、短辺3.5cmの破片で、一辺が面を成す。外面には柱の表現とみられる1条の沈線が描かれている。造山第4号古墳や総社市西山1号墳の家形埴輪の類例から入口あるいは窓の一部と考えられる。

第14図49～53は基底部を図示している。いずれも直径30cm前後の中型品である。出土位置は、49～51が西周溝、52が東周溝、53は東周溝および墳丘南東の造成土から出土した破片が接合している。基部を粘土帯を貼り合わせることで成形する49～51と一枚の粘土帯をそのまま基部とする52・53がある。52のみ黒斑が認められる。49～51・53の底面には粗朶の痕跡が認められる。49・50は外面調整として一次調整タテハケ、内面調整は縦方向の強いナデが施されている。(四田)

金属製品(第15図) T1は、北周溝の集石部分に設けた南北方向のトレンチ調査時に、埋土下層から出土した。出土状況から混入は考え難く、本墳に伴う可能性が高い。残存長26.5mm、重さ7.4gで、直径2cmの半円球状の頭部に一辺7mmの方形の軸が付く。先端は折れて全体の形状は不明。一見鉾に見えるが、当時の鉾にしては大きすぎる。飾り金具的なものかもしれないが類例に乏しく用途不明。総社市窪木薬師遺跡の包含層から両端に円形の頭部が付く鉄製品が出土している。また、頭部と軸部の接合部の造りは、斎富遺跡の竪穴住居58から出土した辻金具に似ている<sup>(5)</sup>。(渡邊)



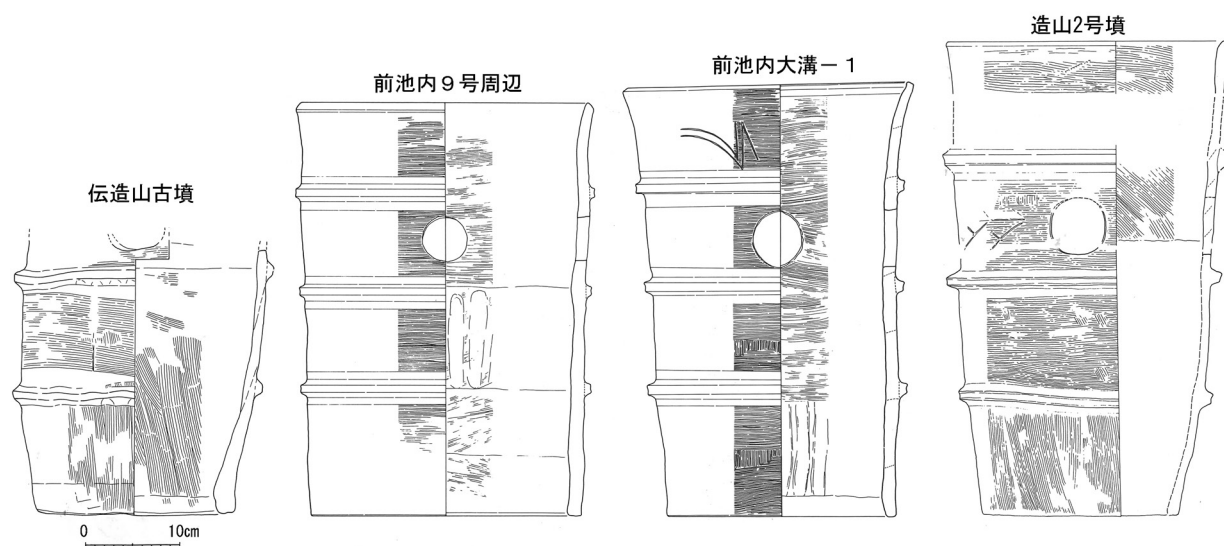
第15図 鉄製品 (1/2)

## 4 総括

一丁坑38号墳は、墳丘の南半分以上が削平され主体部も消滅していたが、周溝を有し、一辺15m以上の方墳であることが明らかとなった。墳丘上では、北辺と東辺の肩口中央に円筒埴輪が2基埋置され、周溝からは破碎された状態の埴輪・須恵器が出土した。埴輪の総出土量から換算して、墳丘上に樹立された埴輪は数本程度であったと見積もっている<sup>(6)</sup>。時期は降るが、墳丘上に間隔を空けて埴輪を配置した例として、前内池1号墳<sup>(7)</sup>が参考となるだろう。円筒埴輪のほか、朝顔・蓋・家など複数種類の形象埴輪が出土したことも特筆される。東周溝では炭を伴う土坑状のくぼみ、北周溝では集石もみつき、多様な墳墓祭祀がうかがえる。

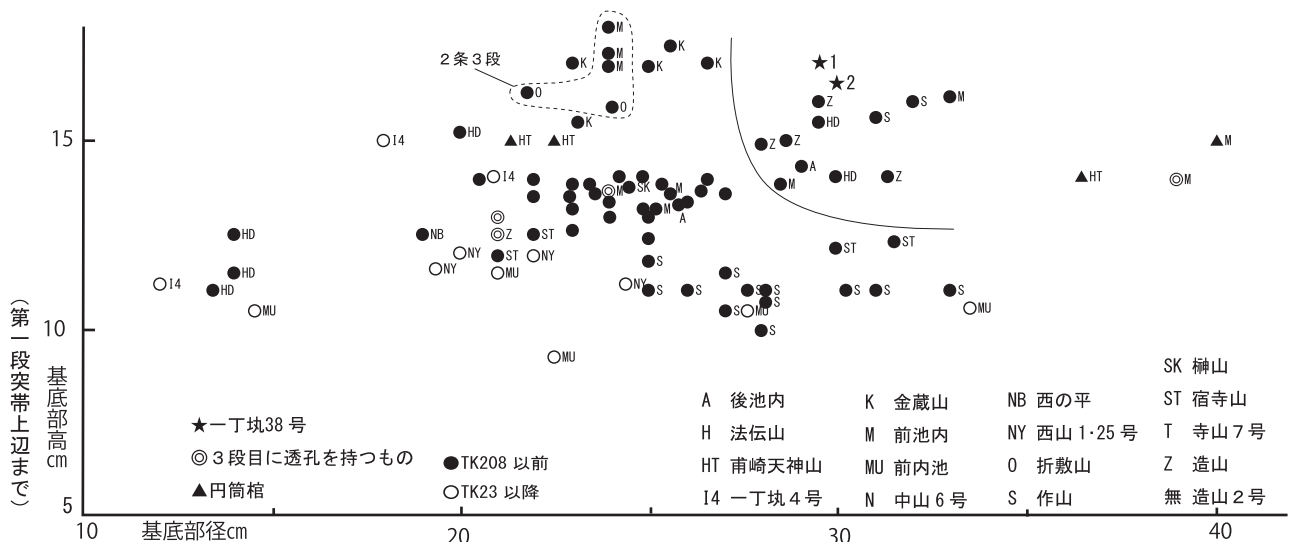
墳丘上に埋置されていた11・12の2基に共通する最大の特徴は円孔を3段目に一對穿つことで、同様の特徴を有する円筒埴輪は造山古墳、造山第2号古墳、前池内古墳群にある(第16図)。造山第2号古墳は造山古墳の陪塚、前池内古墳群は埴輪製作集団の墓とされ、造山古墳と密接な関わりがある古墳に限定的な分布状況を示す。ただし、伝造山古墳及び後二者は3条4段の小型品で、今のところ5条6段以上の確実な例は造山古墳にしかない。11・12は有黒斑・ヨコハケの特徴により川西編年Ⅲ期<sup>(8)</sup>に位置付けられるが、ここであらためて吉備の中での位置付けを考えてみたい。11・12は上半部を欠いているため口縁形態からの比較は不可能であるが、造山古墳周辺の埴輪では時期が降るにつれ第一段突帯の位置が低

くなる傾向が確かめられており<sup>(9)</sup>、基底部の比較により検討を加えてみる。主に県南の5世紀代を中心とする古墳から出土した円筒埴輪の底径と基底部高(第一段突帯上辺までの高さ)を計測し、第17図に図示した<sup>(10)</sup>。土器を伴出した資料に限って概観すれば、陶質土器を伴う造山第2号古墳と榊山古墳<sup>(11)</sup>は径20~26cmで高13~14cm、TK73頃の法伝山古墳では径30cm弱で高14~15cmと径15cmで高11cmの2群に、西の平古墳でも径28cmと径20cm弱で高12cmの2群に分かれ、作山古墳では径30cm以上で高16cm前後と高11cm前後、径25~28で高11cm前後の3群に分かれている。作山古墳ではTK216~208の須恵器片が表採されている。TK208の宿寺山古墳では径22cmで高11.5cm前後となり、TK23以降はおおむね径20cm未満で高10~12cmに集中する。このように、2条3段や円筒棺という特殊な器形を除き、従来指摘されてきたように古墳群ごとにある程度の規格性をもって径、高共に縮小していく傾向が明らかであり、11・12は造山古墳と同じ領域に含まれる。ただし、同じ古墳群内の一丁坑4号墳は径に比して基底部高が高く、この特徴が古墳群の特性を示す可能性もあるため注意を要するが、12のように筒部径が40cmを超える大型の円筒埴輪は管見では造山古墳にしか見当たらない。また、M字形の突帯や静止痕の不明瞭なヨコハケを突帯間に数段に分けて施す手法からも造山古墳と同段階にあることが首肯でき、規格と製作技法から造山古墳併行期に位置付けられよう。しかし、墳丘規模と埴輪の出土量から本墳で独自に埴輪生産が行われたとは考え難く、造山古墳と同じ



第16図 3段目に円孔を有する円筒埴輪 (1/8)





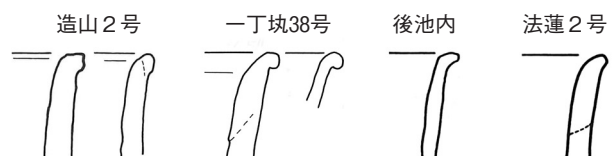
第17図 円筒埴輪の基底部径と基底部高の関係

製作集団から供給を受けた可能性が想起される。

次に、周溝出土の円筒埴輪であるが、いずれも細片で摩滅も著しく、基底部高や突帯間隔が計測可能な個体はない。そこで、口縁部形態に着目すると、造山古墳に特徴的な板状の貼付突帯や、強いヨコナデにより外反させて口縁端面を外に向けるものはないが、端部を折り曲げて突帯状に外方へ突出した特徴（13～17）が認められる。このような特徴は造山第2号古墳にもみられ、2b類に分類されている<sup>(12)</sup>が、15・16は丸味を帯び、17は鈎状を呈し、2b類の後出的な形態とみなすことができよう。一方、後池内古墳<sup>(13)</sup>からは端部を丸く折り曲げた口縁部が出土しており、これは17の後出的な形態とみられ、第18図に示した形態変化を想定できる。これらのことから、周溝出土埴輪は造山第2号古墳と後池内古墳の間に位置付けられ、規格や須恵器から見た年代観とも整合している。しかしこのように考えた場合、大きな問題が生じてしまう。つまり、埴丘上と周溝内の円筒埴輪に時期差が生じることである。この差を理解するには、造山古墳と同格品の埴輪生産が周溝出土須恵器の示す時期まで続いていたか<sup>(14)</sup>、埴丘上の埴輪の入手から周溝における墳墓祭祀までにある程度の時間が経過したと考えねばならない。この問題についての答えを持ち合わせていないが、本墳が造山古墳と同格の円筒埴輪を有していた事実は注目すべきことである。このことは本墳の被葬者と造山古墳、すなわち吉備中央政権の間に強い繋がりがあったことを示唆している。宇垣匡雅氏は埴輪には「他との差・格付けを表示する」性格がある<sup>(15)</sup>とみる。その視点から

見れば本墳はかなり上位に格付けられていたということになる。本墳のように小方墳でありながら大型の円筒埴輪を有する古墳として前池内10号墳が知られているが、埴輪製作に関わっていたと推定されている<sup>(16)</sup>。上田睦氏の「埴丘規模や形態は盟主墳との力関係を現し、円筒埴輪の使われ方は盟主墳との繋がりの深さを表す」<sup>(17)</sup>との見解に従えば、本墳も前池内10号墳同様に、造山古墳を頂点とする吉備中央政権との政治的関係性の中で、造山古墳と同格の円筒埴輪がもたらされたと理解できよう。

吉備では、造山古墳の築造を契機として各地域の首長墳である前方後円（方）墳の築造が低調となり、かわって方墳が築かれる状況が各地で認められている<sup>(18)</sup>。葛原克人氏はこの現象を、造山政権下において階層化が進み、「下位区分としてほぼ等質的に方墳へと埴形の変容を余儀なくされた首長層が組織化されている」<sup>(19)</sup>と捉えた。一丁坑古墳群を含む秦地域でも、4世紀後半の秦大坑古墳以降、6世紀初頭の秦茶臼山古墳まで大型首長墳は確認されず、その間に本墳、一丁坑4号墳、一丁坑15号墳、金子2号墳といった一辺15m程度の方墳が築かれている。これらは確かに埴丘規模が小さいが、10m前後の小墳で構成される各支群においては支群中の主墳となり得る可能性がある。一丁坑4号墳は豊富な形象埴



第18図 口縁部形態の比較

輪を伴い、一丁坑15号墳及び金子2号墳は列石を有する二段築成の特異な構造で、本墳でも造山古墳と同格の円筒埴輪を有するなど、墳丘規模に似合わぬ内容を持つ。何より本墳では「首長墳－前方後円墳・大型方墳に保持された」<sup>(20)</sup>と考えられる蓋形埴輪を伴う点から、ここに、造山政権下で組織化された在地首長層の姿を求めたい。

円筒埴輪からは本墳と造山古墳との強い繋がりが看取でき、造山政権から非常に重要視されていた被葬者像が浮かび上がる。その背景には何があるのか、本墳の被葬者像を考えるに当たって、やはりこの地の持つ特性が重要な意味を持つと思われる。一丁坑古墳群は高梁川に面した丘陵上に築かれているが、ここはちょうど高梁川河谷と平野部との出入り口に当たり、丘陵上からは高梁川を行き交う舟が良く見渡せる場所である。状況証拠にしか過ぎないが、河川交通に関わる役割も一つの可能性としてあげられよう。秦という地名からは渡来人や渡来系技術との関与がうかがわれる<sup>(21)</sup>。

末筆になりますが、本稿をまとめるに当たって岡山市教育委員会、総社市教育委員会には便宜を図っていただき、野崎貴博氏、和田剛氏に有益な教示を賜りました。記して御礼申し上げます。(渡邊)

## 註

- (1) 岡山県総社市教育委員会2014「一丁坑古墳群」・『総社市埋蔵文化財調査年報』などの調査成果から。
- (2) 岡山県教育委員会1994「後池内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89
- (3) 造山古墳からは6条7段、時期が降るが土井遺跡で5条6段の円筒埴輪が出土している。岡山市教育委員会2021「岡山県岡山市史跡造山古墳の調査」『考古学研究』68-2  
岡山県教育委員会2005「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191
- (4) 松木武彦1994「吉備の蓋形埴輪－器財埴輪の地域性研究に関する予察－」『古代吉備』第16集 古代吉備研究会
- (5) 窪木葉師遺跡は鉄器製作専門集団が居住したとみられる集落遺跡で、堅穴住居13からは5世紀前半の在地産初期須恵器や鉄鋌、鍛冶滓などが出土している。齋富遺跡堅穴住居58からは新羅系の陶質土器が出土している。

岡山県教育委員会1993「窪木葉師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86、岡山県教育委員会1996「齋富遺跡」『岡

山県埋蔵文化財発掘調査報告』105

- (6) 11・12を除く埴輪片の総重量は約56kgある。11・12はそれぞれ約9kgあり、残存状況から全体の1/2の重量として単純に2倍した18kgを完形1本分の重量と仮定した場合、3本分となる。径20cm、3条4段の小型品（前池内遺跡で約8.5kg、石膏含む）ならば6.6本となる。
  - (7) 1辺9mの方墳で、墳丘肩口に円筒埴輪が3～4m間隔で3基埋置されていた。岡山県教育委員会2003「前内池古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174
  - (8) 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
  - (9) 草原孝典2014「造山古墳の基礎的考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
  - (10) 各報告書等に掲載された実測図から計測した。誤差はあろうが、おおむね傾向は反映していると考えている。
  - (11) ON231との見解が示されている。田中清美2017「吉備の須恵器生産の始まり」『古代吉備』第28集
  - (12) 2b類に対応。岡山市教育委員会2000『造山第2号古墳』
  - (13) 後池内古墳は副葬された鍬の特徴から5世紀第2四半期頃の築造と考えられている方墳で、円筒埴輪のヨコハケには明瞭な静止痕が観察されている。前掲(2)
  - (14) 造山古墳の埴輪の位置付けは諸説あり、埴輪の供給が複数次行われたという考えもある。岡山市教育委員会1998『造山第4号古墳』に詳しい。
  - (15) 宇垣匡雅2002「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻
  - (16) 前掲(15)
  - (17) 上田睦2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号
  - (18) a 葛原克人1992「造山古墳とその時代」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社  
b 小郷利幸・小野雅明・草原孝典・高橋伸二・森宏之1995「岡山市足守地域の地域史的研究(3)－弥生時代と古墳時代前期、中期－」『古代吉備』第17集
  - (19) 前掲(18) a
  - (20) 前掲(15)
  - (21) 秦氏は大阪府茨田堤や京都府葛野大堰の建設に携わったと伝えられる(『古事記』・『秦氏本系帳』)ように、土木技術にも高い水準を誇った集団であったと考えられる。
- ※紙幅の関係から全ての文献を記載できていない。各遺跡の内容はそれぞれの報告書を参照されたい。





1 遺跡上空から東を望む

令和元年6月撮影



2 古墳全景（南東から）



4 埴輪1出土状況（南から）



3 古墳全景（北東から）



5 埴輪2出土状況（西から）





6 古墳出土遺物